

# 鷗外筆『心理学図表』試解

— 手沢本『西洋哲学史』添付の図表について —

坂井 健

はじめに

- (一) 推定鷗外筆『心理学図表』独文
- (二) 『心理学図表』試訳
- (三) 『心理学図表』試解
- (四) 『心理学図表』の拠所

おわりに

## 要旨

ドイツ留学中の鷗外が西洋哲学を研究するにあたり、シュヴェーグラーの『西洋哲学史』(Albert Schweigler: Geschichte der Philosophie im Umriss. 一七版、ケーベル改訂版、一八八七年)を熟読していたことは、よく知られている。この本の鷗外手沢本は、東京大学付属図書館に所蔵されているが、その巻末に「[Tabelle d. Psychologie] (心理学図表)」と題する鷗外自筆の図表が添付されている。この図表の存在についても、すでに指摘はされていたが、図表の内容の詳細については論じられることがなかった。本稿では、図表を翻字・和訳し、その意味を探り、図表と『西洋哲学史』との関わりを探って行く。その作業を通じて、当時の鷗外の哲学・心理学理解の到達度を計ることができるだろう。

## はじめに

ドイツ留学中の鷗外が西洋哲学を研究するにあたり、シュヴェーグラーの『西洋哲学史』(Albert Schweigler: Geschichte der Philosophie im Umriss. 一七版、ケール改訂版、一八八七年)を熟読していたことは、よく知られている。この本の鷗外手沢本は、東京大学付属図書館に所蔵されているが、そこにおびただしい書き入れがあることについては、早くから小堀桂一郎氏による指摘があった。その後、神田孝夫氏のやや詳しい紹介があったのち、清田文武氏<sup>(3)</sup>がかなり詳細に論じている。

とはいえ、なお触れられていない部分も多いので、この書き入れについて調査・検討することは、当時の鷗外の哲学受容のあり方を知る上で依然として重要なのだが、これについては別の機会に譲りたい。というのは、後ろの扉に「Tabelle d. Psychologie」(心理学図表)と題する図表が添付されているからである。この図表の存在についても、すでに神田氏<sup>(4)</sup>がその論の注の中で次のように指摘している。

この『哲学史要』の巻末には、大学ノート半截の紙片に「Tabelle d. Psychologie. Am 23ten October 1887」と頭書して、Vernunft, Seele, Naturの三極を

立て、それらの間をさまざまな線で結んで、人間と外界の関係、理性と魂の関係を、こまごまと説明した図表が貼付されている。さきに引いた『独逸日記』の項と考え合わせて面白く、またその当時、鷗外がこの書物を勉強していた一証左になるかと思う。

以上が氏の指摘のすべてである。引用文中『哲学史要』は『西洋哲学史』を指す。(直訳すると哲学史概略であるが、本稿では岩波文庫の訳にならって『西洋哲学史』と記すことにする。)「さきに引いた『独逸日記』」云々は、氏が本文中で、鷗外の『独逸日記』の明治二〇年の記述に、哲学についての記述が多く見られると指摘したことを指す。

この一八八七年(明治二〇年)一月二三日の日付のある『心理学図表』(以下、このように記述する。)は、当時の鷗外の哲学理解の到達点を示すものとして興味深いが、その後、特に論じられていないようなので、本稿では、まずこれを翻字・和訳した上で、その意味を探って行きたい。

なお、当時、心理学は哲学と未分化であった(というより、哲学の一部門であった)ので、『西洋哲学史』の裏扉に『心理学図表』があることは、少しもおかしいことではない。これはたとえば、西周訳『筭般氏心理学』の原題が「Mental Philosophie」であったことを考えても推察

されるだろう。つまり、この図表は、哲学のうちの心理学的な方面についてまとめたものであり、『西洋哲学史』の裏扉に貼付されていたことから単純に想像するならば、『西洋哲学史』の中の心理学的方面についての記述の総括であるといえそうである。

### (一) 推定鷗外筆『心理学図表』独文

前述したように『心理学図表』は、『西洋哲学史』の裏扉に貼付されており、二二センチ四方の白いノート(横九ミリの薄い野線がある。)に黒インクで記されている。このうち右側が縦に折り曲げられ、裏扉の左中央部分で糊付けされている(図1参照)。書体は、本文欄外書き込みの書体と酷似しており、鷗外手沢本が一般に他筆によって汚されていないことや一八八七年の日付からいって、鷗外の自筆と見てまちがいない。

その全容は図2 a・bのごとくである。(aによって全体像をbによって詳細を示す。印刷の都合上、中央部分は重複する。以下同様。)さまざまな哲学用語が示され、それぞれが実線および、矢印を伴った実線で結ばれている。

読み難い部分もあるが、これを試みに翻字してみると図3 a・bのごとくになる。(丸枠の数字は説明のために論者がつけたもの。)

① n は、und の略だろう。上の点が省略を示すようである。

② n は、m を示す。中央の Gesinnung などと同様である。

③ Th は当時の書きぐせで、現在では、r は表記されない。右上の That などと同様。

④ 折り込まれており、剥離のおそれがあるので複写できなかった。覗いてみると、上から順に、G, S, M または IV の頭文字で始まる語らしいことが分かる。

⑤ Sensus はドイツ語にはない。ラテン語(感覚の意)であろう。なぜここがラテン語なのかは不明。

⑥ Wesentl は不明。Wesen であれば本質の意味で通じるのだが、1 の後に若干の空白があるようにも見えるので、あるいは、後ろに何かの綴字があったのかもしれない。

以上、多少綴字の解読が不能の箇所もあるが、前後の關係などから意味を頼りに補って、次に和訳を試みたいと思う。

### (二) 『心理学図表』試訳

訳の適不適は識者の叱正を待つとして、作業の都合上、それぞれに和訳を与えると図4 a・b のようになる。

①は読解不能であるが、上下の単語との関連と確実な二つ

の綴字の部分から推して、Gott. すなわち Gottlichkeit の略と読み、神性をとったが、確かなことは分からない。② 同様に綴字の確実な部分からの推測と右肩に現実主義、活動などとあることとの関連から、Materie (物質) ととった。

③ 前述したように折り込みになっている部分だが、上から順に Gewöhn. (Gewöhnung の略) / Sympathie, Nachahn. (Nachahmung の略) ととり、順応、共感、模倣とした。教育の要素としてふさわしいからである。

④ Anschauung は通常直観などと訳すが、知覚の結果得られたもののようなので、見解とした。右に印されている特徴も知覚の結果得られたものといえよう。

⑤ 後ろに、ich を補い、Wesentlich と解して、根本的なものとしたが、よく分らない。

⑥、⑦どちらも仏語でライプニッツの造語である。ライプニッツは独人であるが、書くときは仏語だったので、ここでも仏語になっているのだろう。統覚は、意識を明瞭にし統一する心理過程をいう。

### (三) 『心理学図表』試解

図表を手がかりに、その意味するところを考えてみたい。先に紹介したように、神田氏は理性、魂、自然の三極を

立てていると解している。図表はまさにそのような形をしているが、意味的には必ずしもそうとは言い切れないようである。というのは、矢印を伴った実線は、働きかけや作用を表わしているようであるが、矢印のない実線のほうはそれぞれが結びついているものであることを示しているようにとれるからである。理性、悟性、精神・主体、魂を結んでいるのは、矢印のない実線なので、これはある意味で一つの分類に括るべきであろう。すなわち、これらはすべて人間の心の中の世界なのである。ということはおおざっぱに言って、この図は、人間内部の世界と、その外にある対象・外界・自然との関係を示しているところとすべきであろう。

まず、対象・外界・自然との関わりから見て行く。

\* \* \*

対象・外界・自然は感覚器官を通して、人間の意識に働きかけるわけだが、そこで人間は、外界からの刺激から生まれるさまざまなイメージを意識の中で明瞭なものとし、統合して、はっきりとものごとを知覚する。これが統覚である。

この時には、どのイメージとどのイメージとを統一すべきか、どれとどれとが連続性をもったものであるかが取捨選択されねばならない。これは心理を考える上で根本的・

基本的なものである。

このようにして外界の刺激によって、心の中にはっきりとした知覚が形成される。これは人間の心の中に形成されたものであるが、外界の自然の映像なので、第二の自然とすることができ。

こうして形成された知覚には、表象、連想、記憶、象徴などがある。

ところで、対象・外界・自然は、精神や主体の感性に働きかけるが、その時、人間の心の中には、感情、興奮、刺激、誘惑などが生まれる。

これらを理論的に観察する作用が知覚であって、実際的な意味で観察する作用が注意である。(このあたり、矢印のない実線で結ばれていることに留意されたい。以下も同様である。)

知覚や注意の結果、ものの特徴や、それに対する見解を我々は抱く。これは知覚の結果生まれたものであり、これが表象となる。

表象は、それ自体では個人的、主観的なものである。これが悟性の働きによって客観性を獲得したとき、それが概念となる。悟性は概念によって思考する能力をもつ。そして、悟性の働きには、先験的な能力の範疇が存在する。これらはすべて論理の領域であり、判断や推論といった能力

もこれに属する。

判断や推論と行った能力は、経験から理論的に考えることによって、観念的(理念的な)な理性に働きかけることを可能にする。そのようにして、人間はものを考え、真の知識・認識・学問とそれを司る理性にいたることができるのである。

\* \* \*

ほぼ以上のようになるだろう。次に、左下の魂との関わりから見て行きたいが、魂はその上に記された精神に対して用いられる。魂は、動物でも人間でももっているが、精神は人間しかもっていないものである。要するに、霊的な作用のうち、より根源的なものを魂、より高次なものを精神と呼ぶわけである。

魂の下に付いている必然性・偶然性という説明は、左上の理性に付された普遍性・(神性)・精神の必然性、永遠性との対比によって理解できる。前述したように、魂と精神と悟性、理性とは矢印のない実線によって結ばれており、相互の結びつきを表していると考えられるが、魂の上に精神が置かれていること、その上に悟性、さらにその上に理性が置かれていることから、上に行くほど高次な人間の霊的な働きを示している訳である。すなわち、魂においては、必然性と偶然性とは混在していたが、それが高次な理性に

なるに及んで、普遍的で必然的なものになるということである。では、魂の関わりから見て行く。

\* \* \*

魂は人間の霊的な働きの中では最も根源的なものであるが、ここでは必然性と偶然性とは混在している。

この魂は、順応・共感・模倣の働きによって理性に達することができ、このような役割を果たすのが教育である。

魂は、人間においては自己意識と対象意識とを区別する能力としての感覚を備えた精神となる。これが主体である。

この精神が願望をもったとき、それは分別となり、思慮深い意志の導きによって意図・決心・決意となる。

精神は、感性的な存在に過ぎないが、より高次の段階として悟性に達することができる。これは知性的な思考能力をもったものであるが、悟性には、先験的に備わった能力の諸範疇がある。(以下、悟性に関しては重複するので省略)

しかし、人間には、知性的な悟性の領域、論理を超えた理性の能力が備わっている。それは普遍的なものであり、

神なものである。このような精神の存在は必然であり、それは永遠性をもっている。

魂は肉体を通して対象・外界・自然を感覚する。

\* \* \*

次に、左上の理性から対象・外界・自然に向かう矢印にそって見て行く。

\* \* \*

悟性は、概念によって論理的な判断、推論を思考によって行なったが、理性は、それ自身自由な意志をもっている。それは実践的な性質をもっている。このような働きが信念である。

さて、自由意志は、意図・決心・決意となって現実世界に向かおうとする。

このような働きは、実際の世界に対する活動であり、現実主義的なものである。

意図・決心・決意は、行動・行為・手段を通してその目的を対象・外界・自然において遂げようとする。

\* \* \*

雑駁ながら、言葉を補いつつ図表を読み取って行くと、以上のようになるであろう。

#### (四) 『心理学図表』の拠所

では、この図表は何に基づいて作られたものだろうか。

前述したように、『西洋哲学史』に基づいていると考えるのが素直である。だが、この図表そのものにドンピシャリとあてはまる箇所は、『西洋哲学史』からは見いだせなかつ

た。しかしながら、図表で示されていることが、語られている内容の多くはきわめてカント的である。

① すなわち、悟性と理性とを分け、悟性を知性、論理的思考能力の領域にとどまるものとし、理性と対立を伴っていること。これがまず第一点である。

② 第二に、これは第一点と関わることであるが、悟性に概念的な思考能力を充当していることである。

③ 第三に、悟性の中に範疇、すなわち思考形式ののカテゴリーを与えていることである。カントは、悟性の中に先験的に存在している概念を明らかにしようとして、思考の形式を範疇(純粹悟性概念)と称して、四綱一二目の分類表を確立したが、図表中「先験的範疇」とはこれを指すものである。

④ 第四に、知性の働きである悟性を、知覚の働きである感性と区別していることがあげられる。

⑤ 第五に、理性が実践的に行為を導いて行く自由な意志であるとしている点があげられる。<sup>(1)</sup>  
以上のような点にっして、『西洋哲学史』ではどのような述べられているであろうか。

Vor dem Verstand im einigen Sinne unterscheidet sich die Vernunft. Wie der Verstand seine

Kategorien, so hat die Vernunft ihre Ideen. Wie der Verstand aus den Begriffen Grundsätze, so bildet die Vernunft aus den Ideen Prinzipien, in denen die Grundsätze des Verstandes ihre höchste Begründung finden. Der eigentliche Grundsatz der Vernunft überhaupt, ist zu der bedingten Erkenntnis Verstandes Das Unbedingte zu finden, womit die Einheit desselben vollendet wird. Die Vernunft ist also zwar das Vermögen des Unbedingten oder Prinzipien, aber da sie nicht unmittelbar auf Gegenstände sich bezieht, sondern nur auf den Verstand und dessen Urteile, so muss ihre Thätigkeit eine immanente werden.

(一三三―一三六頁)

理性 (Vernunft) と狭い意味の悟性 (Verstand) とはちがう。悟性はカテゴリーを、理性は理念 (Idee) をもつ。悟性は概念から原則 (Grundsätze) をつくるが、理性は理念から、そのうちに悟性の原則が最高の基礎づけを見出すところの原理 (Prinzipien) をつくる。理性の固有な原則は、一般に、悟性の制約された認識にたいして無制約的なものを見出し、これを

てその統一を完成することである。だから理性は無制約的なものの、すなわち原理の能力ではあるが、しかし現象と直接に関係せず、悟性とその諸判断とのみ関係するから、その活動はあくまで内在的でなければならない。(谷川徹三、松村一人訳) (傍線鷗外)

「内在的でなければならない」の箇所が引かれ、ページ下の欄外に図5のような書き込みがある。左から、Verstand im w. S.と読め、上下二段に分類されていて、上段は、Verstand i. e. S. — Kategorien — Grundsätzeと読め、下段は、Vernunft — Ideen — Prinzipien (Unbedingte)と読め。w. S.は、weiter Sinnの略、すなわち広い意味ということだろう。

単純に訳を与えると、次のようになる。

広義の理性／悟性すなわち意味—範疇—原則／理性—理念—原理(絶対的)

要するに、広義の理性は、悟性と理性とに分けることができ、悟性のほうが普通という理性の意味である。悟性には範疇があり、原則をつくるものである。他方、理性は、理念をもち、絶対的な原理をつくる。以上のような意味を表していると思われる。

これが先の引用のまともになつてゐることは一目瞭然だ

あろう。

さらに言うなら、(理性は)「現象と直接に関係せず、悟性とその諸判断とのみ関係するから、その活動はあくまで内在的でなければならない。」という条は、『心理学図表』の中で、理性に向かう矢印が「判断、推論」近辺の悟性を中心に括られた丸内から出発し、外界からは直接理性に向かう矢印が存在せず、外界は、悟性の丸枠を経由してからしか、理性に関係できないことと対応している。

なお、この部分からは先にあげた①、②、③の特徴が読み取れるだろう。

やつ、ほかにも対応する箇所はないであろうか。

Ausser ihrer regulativen Bedeutung haben die Vernunftideen auch noch eine praktische. Es giebt ein, zwar nicht objektiv, aber subjektiv zureichendes Fürwahrhalten, das vorherrschend praktischer Natur ist und das Glauben oder Überzeugung genannt wird. Wenn die Freiheit des Willens, die Unsterblichkeit der Seele, das Dasein Gottes drei Kardinalsätze sind, die uns zum Wissen gar nicht nötig sind und uns gleichwohl durch unsere Vernunft dringend empfohlen werden, so

werden sie ihre eigentliche Bedeutung im praktischen Gebiet für die moralische Überzeugung haben. (二四二頁)

規制的な意義のほか理念は実践的な意義を持つて  
いる。われわれは客観的には十分でないにせよ主観的  
には十分な信念——それは本性上主として実践的であ  
り、信念とか確信とか呼ばれている——をもっている。  
意志の自由、魂の不死、神の存在が、知識には必要で  
ないのに理性が切にわれわれにもたせようとしている  
三つの根本原理であるとすれば、それらの本来の意義  
は実践の世界において、すなわち道徳上の確信に対し  
て存在するのである。

これは先にあげた⑤の特徴と対応するものである。同時  
に、『心理学図表』の理性の下に書かれた「神性、精神の  
必然性・永遠性」(ただし、図表は Seele ではなく、Geist  
を使っている。)の説明や、理性から発している矢印上の  
「自由意志(実践的)」という説明、および矢印の下の「信  
念」という付記とに対応するものである。

わずわらしいのであげないが、このほかにも『西洋哲学  
史』には、カントがあげた悟性の範疇の四綱一二分類があ

げられており(二二三頁)、『心理学図表』中の「先験的範  
疇」とあるのはこれに対応している。

おわりに

要するに、『心理学図表』は、鵬外がシュヴェーグラー  
の『西洋哲学史』を学習して行く過程で獲得した哲学の中  
の心理学部門に関する知識を総動員しながら、とくにカン  
ト哲学における心理学の解釈に重きをおいて図表化したも  
のであるということができよう。その作成にあたっては、  
『西洋哲学史』に傍線を引いたり、書き込みをしたりしな  
がら作業を進めていったのである。

おそらくは孤独な作業だったであろうが、その到達点は、  
当時の日本人としてはおどろくべきレベルの精密な心理学  
理解だったといえよう。

それはともかくとして、本稿を作成しながら一つ気になっ  
たことがある。それはかつての神田氏の指摘(註)とも重なるこ  
とであるが、図表にハルトマン臭さが少しも感じられない  
ことである。これはカントを理解するための図表であった  
のだから、それも当然であるという見方もできるかも知れ  
ないけれど、手沢本の書き込みについてみても、ハルトマ  
ンについては、少ないのだ。(欄外書き込み一箇所、傍線  
部二箇所)

これはやはり、神田氏の指摘が正しさを裏づけるものだろう。すなわち、鷗外がハルトマンに傾倒、耽読したのは、ベルリン留学中のことではなく、帰朝後のことだったのである。

## 注

- (一) 小堀桂一郎『若き日の森鷗外』（東京大学出版会、昭和四四年）
- (二) 神田孝夫「森鷗外とE・V・ハルトマン——『無意識哲学』を中心に——」（吉田精一、福田陸太郎監修『比較文学研究 森鷗外』朝日出版社、昭和五三年）
- (三) 清田文武『鷗外文芸の研究 青年期篇』（有精堂、一九九一年）
- (四) 注（一）に同じ。
- (五) 谷川徹三、松村一人訳『西洋哲学史 上・下』岩波文庫、昭和三年改版）
- (六) 一部赤インク。赤の部分は以下の通り。左上の Wissen、及びそこから発する小さな矢印。左上の Erfahrung, Meinen。左中程の Gebiet der Logikとそれを囲る大きな丸。左下の Sinn (unterscheidendes Vernögen), (Senses)。中程の (perceptis)。右端の (apperception) とそれに向かう矢印。その左下の (wird in der Seele behalten)。
- (七) 図表中では、現実主義の対として用いられているので、觀念主義の訳を与えたが、ここでは理想的な存在としての理念

を含む理性に達することができるという意味である。理念主義という語はなじまないいで觀念主義としたわけだが、抽象的な存在という、消極的な意味での觀念ではない。

(八) 「精神もそれに先だつ物質と生命と靈魂の統一なしにはありえない。物質はむろん無生物のものであるが、生命となると、これをもつものは植物であり、靈魂は動物に限られる。動物の靈魂も外界を意識し、これにもとづく反応を表現するが、この意識には自己意識も対象意識も備わらず、また表現も即身的であつて離身的ではなく、表現というより、むしろ表情の域にとどまる。しかし人間となると、物質と生命と靈魂のほか、さらに精神を備え、これによって一面自己意識を、他面対象意識をもち、感情も意志も行為もこれとの作用

連関において行なわれるから、ここでは体験も客観的形式において表現されることになり、靈魂においては遺伝であつたものが伝統に転ずる。」（『哲学事典』（平凡社、一九七一年）「精神史」の項目参照。）

(九) 「カントは認識の形式（直観あるいは感性と思维あるいは悟性の二形式）と質量を区別し、思维の形式を範疇（純粹悟性概念）と称し、アリストテレスの範疇は經驗的に寄せ集められたもので不完全であるとして、形式論理学の判断表にもとづき、有名な四綱一二目の範疇表を確立し（判断は思维の表現なるゆえ判断形式の種類のあるだけ思维形式の種類もあるとの根拠から）、これらの範疇がいかにして客観的妥当性を有し、先天的総合認識を基礎づけるかを論証しようとした。」（『哲学事典』「範疇」の項目参照。）

(一〇) 「カントは悟性を一方には感性に、他方には狭義の理性に對して、はっきり区別した」（『哲学事典』「悟性」の項目

参照)

(一) 「人間が理性的動物であるのは単に概念的思惟を行ないうる能力だけについていわれているのではなく、他の動物がすべて本能的な衝動によって行動するのに対して、人間の行為には義務の意識がともなうことが本質的であり、なんらかの理性的な働きによってみちびかれることが人間の行為の特質をなしている。このように本能や衝動や感性的欲求などにもとづく行動に対して、義務ないし当為の意識によって決定される行為を理性的であるといい、そういう行為をみちびく

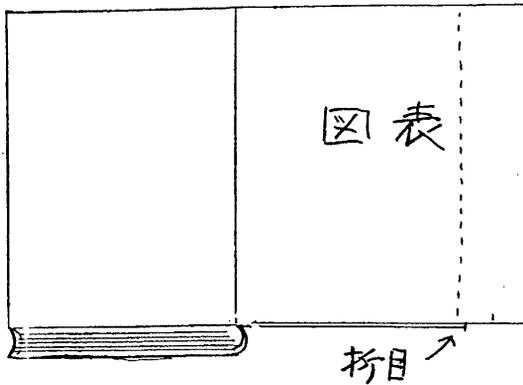


図 1

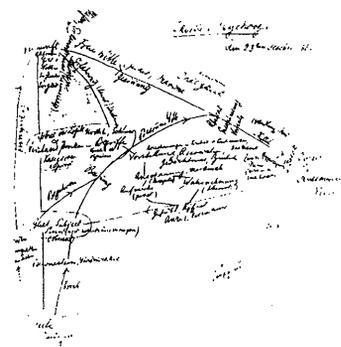


図 2 - a

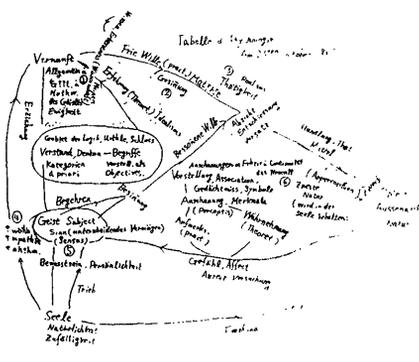


図 3 - a

能力をも理性のうちにくくめる。カントの実践理性は理性のこのような働きを学問的に規定したものであって、「汝ないうべきがゆえになし能う」Du kannst, denn du sollst. という言葉があららかに示しているように、自律的に道徳法を立てるばかりでなく、さらに行為をみずから定めた道徳の法則に合致するようにみちびいていく意志の力がそれである。」  
 『哲学事典』、「理性」の項目参照)  
 (二) 注 (一) に同じ。

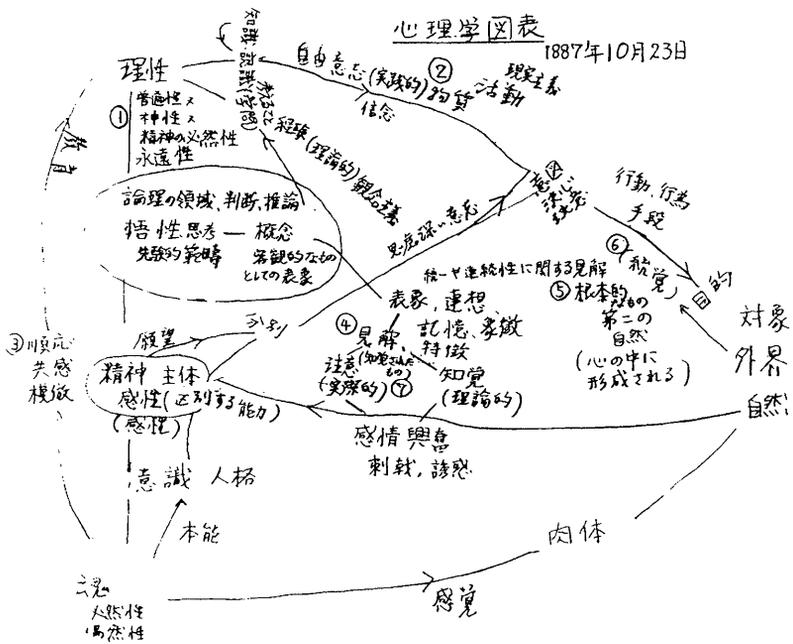


図 4 - a

1. 知識 } Verschiedene - Kategorien - Grundstoffe  
 in der S. } i. e. S.  
 2. 知識 } Vernunft - Ideen - Prinzipien  
 in der S. } (illegible)

図 5

# Tabelle d. Psychologie.

Am 23ten October 1887.

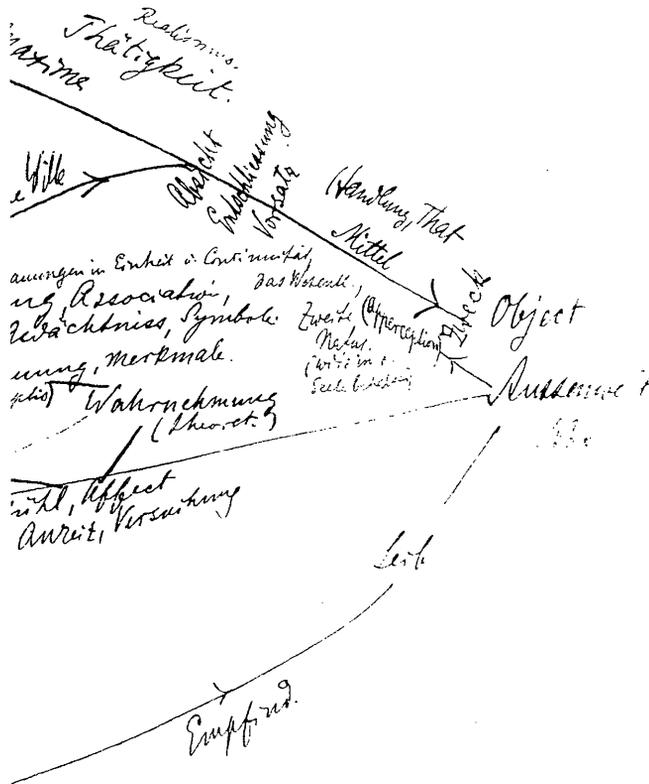
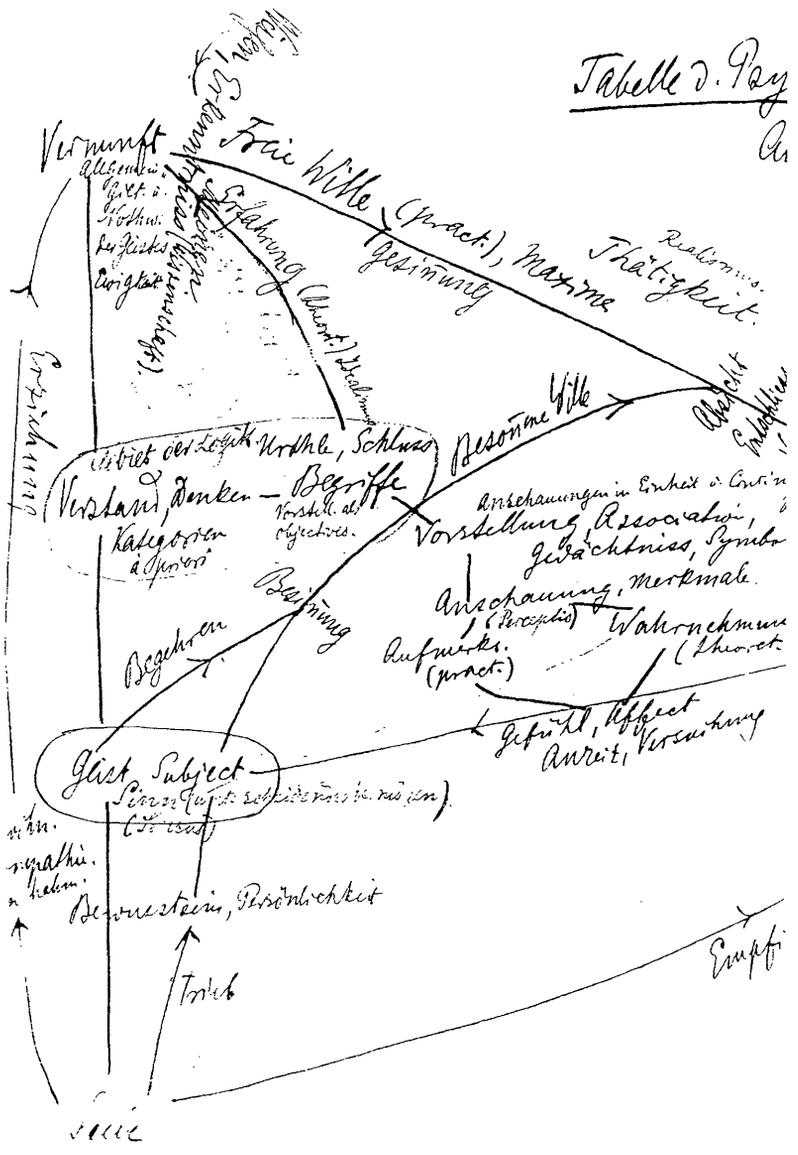


Tabelle v. Pay

Ca



d. Psychologie.

Am 23<sup>ten</sup> October 1887.

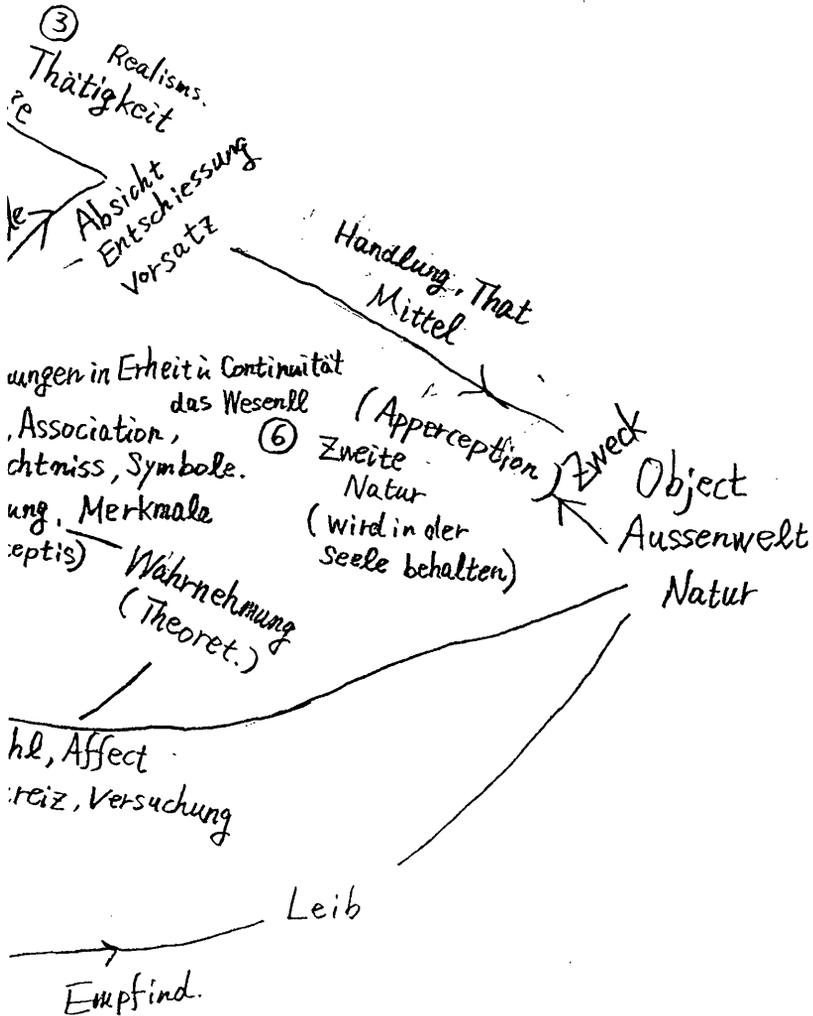
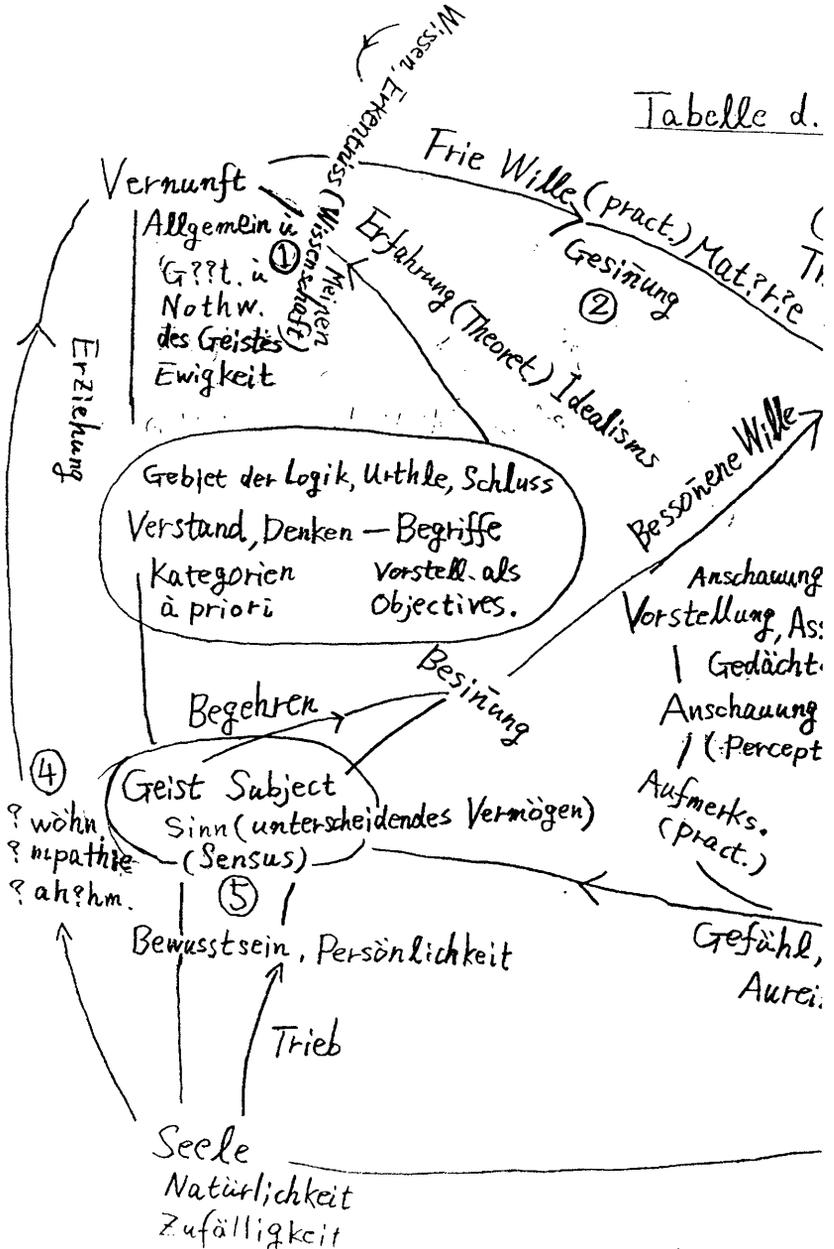


图 3 - b

Tabelle d.



理学図表

1887年10月23日



図4-b

